



Title	中国人日本語学習者のライティングに関する実証的研究 : 論理的文章作成を旨とする指導方法の改善に向けて
Author(s)	劉, 偉
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58294
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【1】	
氏 名	劉 偉
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 4 1 3 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 6 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	中国人日本語学習者のライティングに関する実証的研究－論理的文章作成を旨とする指導方法の改善に向けて－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 村岡 貴子 (副査) 教 授 日野 信行 准教授 大谷 晋也

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、中国の4年制本科大学における、日本語専攻の高学年学部生（CLJ：Chinese Learners of Japanese）の論理的ライティング力の育成に資する実証的研究である。

本研究では、情報伝達を正確かつ効率的に行い、主張や意見を根拠に基づいて論理的に書く能力を、論理的ライティング力と定義する。この能力は、CLJの目標言語である日本語に依拠した言語表現力とともに、彼らの論理的思考力にも深く関係している。そのため、ライティング教育においては、いかにして論理的思考力を用いて整合性のある意味内容に基づいた文章を生成するか、に注目した学習活動を取り入れる必要があると考えられる。

中国の大学における日本語専攻教育は、1990年代以来、教育政策の変化による学科の新設や定員増により、学習者が急増し、学習のニーズが多様化しつつある。そのため日本語専攻教育では、教育理念と人材育成の目標の見直しがなされており、転換期を迎えつつある。特に高学年の学部3、4年生に対しては、彼らの大学卒業後の就職や進学/留学に求められるビジネス文書やアカデミックな文章といった、実用的なライティングのニーズに応えるための論理的ライティング力を育成することが新たな課題になっている。

一方、ライティング教育のあり方に対する再検討は、現状ではあまりなされていない。教育の現場におけるライティングは、「精読」の授業で学習した文型や表現を定着させる手段とされており、本来の意味伝達の機能は必ずしも十分に重視されていない。ライティングのタスクで扱う文章ジャンルは手紙や感想文、意見文から卒業論文にまで至るものの、授業での指導項目や教師添削の重点は日本語の文法や表現の正確さにかなり偏っている。また、CLJのライティングに注目する研究はごく少数に限られており、転換期にある日本語専攻教育のライティング指導の見直しに必要な、体系的な研究が十分に行われているとはいえない。

本研究ではこうした問題を踏まえ、CLJの大学卒業後のニーズを視野に入れ、専門日本語教育の観点を取り入れた論理展開の側面から、彼らの論理的ライティング力の育成を旨とする指導方法の改善について以下の通り検討を行った。

第1章では、本研究の背景として、中国の大学における日本語専攻教育の歴史的変遷と、専門日本語教育の発展について概観し、ライティング教育に関する問題を探った。その上で、本研究の位置付けを述べ、各分析の詳細な目的を明らかにした。

第2章では、専門日本語教育研究の流れを概観した上で、同研究分野で提唱されている論理展開の観点から行われたライティング研究について整理した。先行研究の知見に基づき、1) CLJにおけるライティングのニーズをさ

らに綿密に把握していく必要性、2) 論理展開に注目して分析する観点の重要性、といった2つの側面から示唆を得た。

以上を踏まえ、第3章では本研究で用いる種々のデータの収集方法について概説した。それらのデータを用いて、第4章から第7章においてそれぞれ異なる側面から分析を行い、第8章で教育現場への示唆を得た。

第4章では、アンケートとインタビューによって実施した意識調査の結果をまとめ、CLJのライティング学習の実態について量的・質的分析を行い、ライティング指導に説明的文章を取り入れる必要性について検証した。まず、CLJがライティング授業の課題として作成した経験のある文章ジャンルを調査し、説明的文章の低い割合を明らかにした。次に、ライティングのタスクに取り入れる必要のある文章ジャンルに関するCLJの認識を分析し、実用的な文章や説明的文章に関連するタスクの必要性を示した。また、教員におけるライティング教育に関する信念を検討し、文学的文章が高い割合になる原因について議論した。

第5章では、意識調査の結果に基づいて、CLJのライティングに対する意識について量的・質的分析を行い、論理展開に関する指導の必要性を指摘した。まず、CLJにおける教員の指導に対する認識と評価について分析し、彼らが持っている論理展開に関する指導への高い要望を明らかにした。次に、CLJのライティング意識を分析し、文法や表現、文体、論理展開といった3項目は、CLJが指導を受けたと認識し、かつライティング時に重視するにもかかわらず困難を感じることを明らかにした。また、CLJにおけるライティング授業への期待と、授業を担当する教員の信念の相違を検討した。以上の結果に基づき、CLJへのライティング教育の現状を明らかにし、論理的文章作成を目的とした指導が必要な項目、指導方法など、彼らのライティングに関するニーズについて総合的に考察を行った。

第6章では、上記の結果を踏まえ、論理展開の観点から、CLJの説明的文章の産出における自己推敲について量的・質的分析を行った。関連の先行研究を概観した上で、まず、自己推敲を抽出して、「表面的推敲」、「言語標識と情報配列の調整」、「情報の調整」の3レベルと、「加筆」、「削除」、「書き換え」、「順序変更」、「分割/結合」の5項目に分類した。次に、推敲前後の分量の変化、推敲の頻度、各CLJにおける論理展開に関する推敲の傾向について量的分析を行った。その結果、論理展開に関する自己推敲は全体的に少数であった。そのうち記述された情報の付加などの「情報の調整」が、「言語標識や情報配列の調整」より多く行われていることが分かった。また、割合が顕著に高い項目に絞り、具体例に基づいて推敲による文章の論理性の改善の有無に注目して質的分析を行った。その結果、CLJは論理展開の推敲過程には文章全体やテーマとの整合性への配慮が不足していることが明らかになった。

第7章では、CLJの産出した説明的文章に絞って論理展開の分析を行った。文章サンプルの全体像を把握してから、まず、論理的文章に求められる基本条件として「重点の明示性」、「内容の説得性」、「配列の適切性」、「視点の一貫性」を提案した。次に、主題文の出現状況に基づいて文章全体の論理展開の型を明らかにし、CLJの説明的文章における「重点」を明示する傾向を明らかにした。その後、意見文における〔例証〕の論証構造に焦点を当て、論理展開の問題を検討し、CLJにおける「内容の説得性」と「配列の適切性」に関する問題を指摘した。最後に、それらの問題の発見および解決のための母語による内省の有効性を検証し、指導現場への示唆を得た。

第8章では、上記第4章から第7章の分析結果を受け、1) 把握されたCLJのニーズをもとに、カリキュラム編成に反映して実施し、評価する必要性、2) 説明的文章を柱とするライティング教育に論理展開の指導を導入する必要性、3) 日本人教員と中国人教員双方のメリットを最大限活用できる協働指導体制を構築する必要性、といった3つの側面からCLJの論理的文章作成を旨とする指導のための示唆を得た。

本研究で得られた成果を以下の通りまとめる。

- CLJ に対するライティング教育の現状および問題を明らかにし、論理的ライティング力を育成する必要性を調査に基づいて検証した。
- CLJ のライティング学習の実態とライティングに対する意識を明らかにし、説明的文章に基づいた論理展開に関連する指導の必要性を指摘した。
- 論理展開に注目した推敲の分類方法を提案し、CLJ の文章産出における論理展開の扱い方を明らかにし、問題点を指摘した。

- (4) 論理的文章に求められる基本条件として「重点の明示性」、「内容の説得性」、「配列の適切性」、「視点の一貫性」を提案し、具体的な文章例に基づいてその有効性を検証した。
- (5) 具体例に基づいて CLJ の産出文章の論理展開の問題を検討し、彼らが各自でそれらの問題をモニターするためには、母語による内省が有効であることを示した。
- (6) 以上の結果に基づき、CLJ の実用的なニーズを視野に入れた、日本人教員と中国人教員の協働指導体制を提案した。

今後さらに、1) 中国人教員におけるライティング教育に対する信念に関する研究、2) 教育現場に向けた本研究の成果に対する発展と検証、3) 認知心理学の観点から CLJ の文章産出に対するメタ認知に対する検討、にも取り組みたいと考える。

論文審査の結果の要旨

本研究は、中国の4年制本科大学における、日本語専攻の高学年学部生（CLJ : Chinese Learners of Japanese）の論理的文章のライティング力の育成に資する実証的研究である。中国の大学における日本語専攻教育は、1990年代以来、教育政策の変化による学科の新設や定員増により、学習者の急増、および学習のニーズの多様化等の現象が見られる。中でも学部3、4年生に対しては、卒業後のニーズに応えるための論理的文章のライティング力を育成することが新たな課題になっている背景がある。このような背景のもと、本研究は、CLJ の大学卒業後の就職や進学/留学に求められるビジネス文書やアカデミックな文章などの実用的なライティングのニーズを視野に入れ、専門日本語教育の視点を取り入れて、論理展開の側面から、彼らの論理的文章のライティング力の育成を旨とする指導方法の改善について検討を行った。本論文では、論理的文章のライティング力は、情報伝達を正確かつ効率的に行い、主張や意見を根拠に基づいて論理的に述べる能力と定義されている。

本研究は、北部、中部、南部に位置する中国の総合大学での調査および卒業生への調査をもとに、まず、中国の大学の日本語専攻教育におけるライティング指導の問題を探り、CLJ の論理的文章のライティング力を育成する必要性を検証した。その上で、大量のアンケートおよびインタビュー調査により、CLJ のライティング学習の実態とライティングに対する意識を明らかにし、必要な指導内容と指導方法を分析した。その結果、文法等に加えて、文章の論理展開に関するニーズが高く、十分に指導されていない現状や、フィードバックが十分ではない指導方法の不備等の問題点が明らかとなった。続いて、CLJ の文章産出時における自己推敲の論理展開への扱われ方を明らかにし、問題の有無を探った。あわせて、論理的文章に求められる基本条件を検討し、それに基づいて CLJ の産出した文章における論理展開の問題、およびその原因を明らかにした。論理的文章に求められる条件として「重点の明示性」、「内容の説得性」、「視点の一貫性」、「配列の適切性」を提案し、それらの条件に照らし合わせて文章全体および〔例証〕における論理展開を検討した。さらに、CLJ の文章産出後の中国語による内省についても検討した。「配列の適切性」については CLJ の問題が重篤であり、指導の際に重点が置かれることが必要であることを指摘した。以上の議論をもとに、これまで踏み込んだ議論がなされていなかった、ライティング指導における担当教員の指導体制について総合的に考察した。これは、必ずしも日本語教育学が専門ではない日本語母語話者の教員に任せきりであったライティング指導を、学習者の母語を活用して文章の論理展開や構造の説明やフィードバックが行える中国語母語話者の教員との協働体制を旨として改善していくものである。

本研究の特徴は、非母語話者の研究者が取り組むアカデミック・ライティングに関するテーマの斬新さに加え、先行研究を十分に読み込んだ上での明確な研究の位置づけ、統計的手法や、データマイニングも十分に活用した量的分析、論理展開や推敲作業の過程を丹念にたどった質的分析、さらには、母語話者と非母語話者の協働体制への示唆等、有意義な議論を多く含む内容と効果的な構成にある。日本語母語話者の教員への調査・分析をもとにした考察を一層深めてほしいという要望等もあるが、全体としては、極めて意義深い研究の集大成となっている。以上のことから、博士（言語文化学）の学位論文として価値あるものと認める。